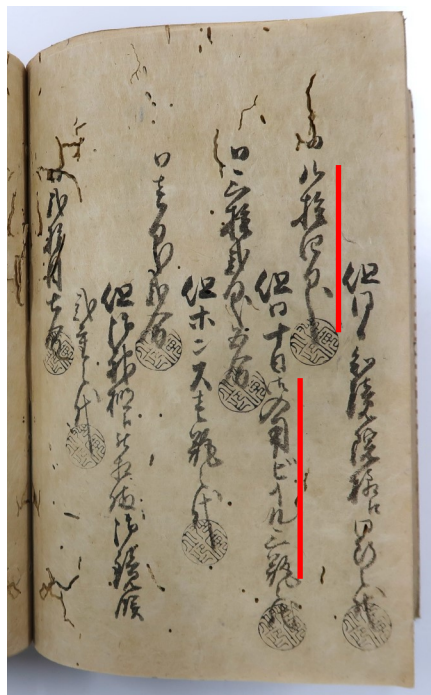


明治2年11月「御入用ヒール三拾五疋」



明治3年4月10日「御入用ビール三瓶」

文書館資料で  
旅する山口県

# 防長紀行

✳️ 04

御銀請払御一紙 五十鈴御殿厨房署（9諸省261（2の2））

名物 ④

## 幕末維新期の山口とビール(3)

### 《毛利家と山口とビール》

慶応元年(1865)の元治の内戦終結から明治4年(1871)6月毛利元徳の東京移住までの間、毛利家の拠点は山口でした。この間、毛利敬親・元徳父子とビールとの関わりを示す史料が多く残っています。

「御銀請払御一紙 五十鈴御殿厨房署」(9諸省261<2の2>)は明治2年7月～3年8月、山口藩知事毛利元徳の居所五十鈴御殿内の厨房署(毛利家内で使う食品、医薬品、日常品の購入担当部署)が作成した帳簿です。この中に明治3年4月「御入用ビール三瓶」84匁の購入記事があります(上写真)。「御入用」とあり、元徳が飲むビールとみてまちがいないでしょう。1瓶は銀28匁。かなり高価なものでした。同年3月には「召上り極上サンハン酒式瓶」120目(匁)も記載されています。極上シャンパンは1瓶60匁もするさらに高価な飲み物でした。

同帳簿には明治2年11月に「御入用

ひいる三拾五疋」11匁の記事があり、これもビールを指すと考えられます(上写真)。ただし単位は「瓶」ではなく、「疋」表記です。「疋」は銭や布の単位で用いられた字です。あるいはこの「ひいる」は、ビール樽からの量り売りでの購入で、この「疋」とは、たとえば「g」「cc」など外国人の用いる容量単位を表しているのかもしれませんが。

慶応3年9月～4年(明治元年)1月29日の内容を記した「御銀払御一紙 新御殿御台所」(9諸省261<2の1>)にも、慶応3年12月8日の購入品として、「御入用御薬六品」「酢耆合」とともに「ひいる七拾疋」の記載があり、その合計が18匁7分1厘と記されています。ここでも「ひいる」の単位は「疋」です。この「ひいる」もビールであれば、現時点これが毛利家とビールの関わりを示すもっとも早い事例となります(当館所蔵文書中)。

なお、慶応3年と明治2年では「ひいる」1疋の値段が異なるようですが、これはビールの品質の違いのせいかもしれません。



毛利敬親  
(吉富家文書156)



毛利元徳  
(柳原家文書220)

12月8日、京都での朝議において「朝敵」毛利家の処分が許され、つづく9日には王政復古が唱えられて新時代への幕が開いていきます。この情報は13日には山口の敬親・元徳の元に届きます（「柏村日記」）。両名がこの「ひいる」を口にしたのは何時だったでしょう。

《明治3年の毛利家とビール》

脱隊騒動の終結後、明治3年4月21日、毛利元徳は木戸孝允・杉孫七郎ら10数人を伴って山口を発ち、5月2～6日鹿児島島の島津家を訪問します（帰山口は12日）。脱隊騒動鎮圧に対する島津家慰問への御礼、および今後も共に朝廷へ協力することを約束するための訪問でした。元徳が山口へ戻ると、間もなくして今度は敬親が、5月22日山口を発ち10月まで東京に滞在します。政府の要請によるものでした。

慌ただしかった明治3年、以下の記録中に敬親・元徳とビールとの関わりを示す記述が見えます。「サンパン(シャンパン)」「洋酒」の事例も含め紹介します（シート(1)(2)で紹介のものは略。このほか「ロウエン」というオランダの酒の記載もありますが省略）。

- a「御奥日記」(19日記50)
- b「敬親公御旅中東京日記」(4忠正公86)
- c「日帳 大殿様家従座」(19日記49)

【在山口の敬親・元徳】

[5月15日:a]近々東京へ帰還する木戸を元徳が招き、酒を振舞う。この席の酒としてビール4徳(瓶の意味か)あり。またこの日、元徳が鹿児島お土産として敬親へビール、「御杉重」(菓子折)、カステラ1箱を進上。

[6月7日:a]元徳が菓子と「サンパン」を口にします。

[9月3日・5日:a]元徳、ビール1瓶を飲む

[閏10月13日:c]東京から帰国した敬親が、豊浦藩知事毛利元敏へ東京滞在中のお見舞いへの御礼として蕎麦切三重と洋酒3瓶を贈る。

[閏10月24日:c]敬親が徳山藩知事毛利元蕃へ上記同様の御礼として蕎麦切三重と洋酒3瓶を贈る。

[12月12日:ac]敬親がビール5本を飲む。

[12月12日:ac]神戸本陣の専崎弥五郎が敬親・元徳へ広東風腸肉2斤、猪肉味噌漬1樽と共に「シャンパン」半ダースを献上。

[12月13日:ac]元徳が前日の献上品を口にします(シャンパンは3瓶)

【東京滞在中(5～10月)の敬親】

[7月28日:b]「ヒワ(ビール)」1瓶飲む

[7月29日:ab]平岡平吉がビール2瓶献上

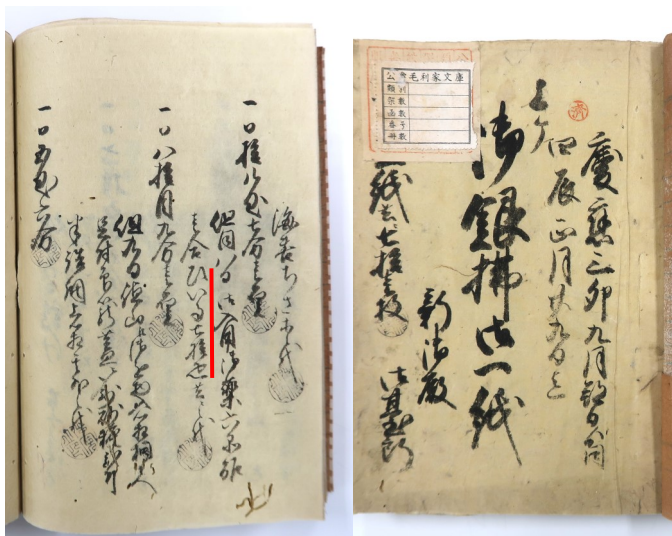
[7月30日:ab]「ヒワ」2瓶飲む(1本は「東京出来」とあり。日本製造のビールか)

[8月2日:a b]「ヒイル」1瓶飲む

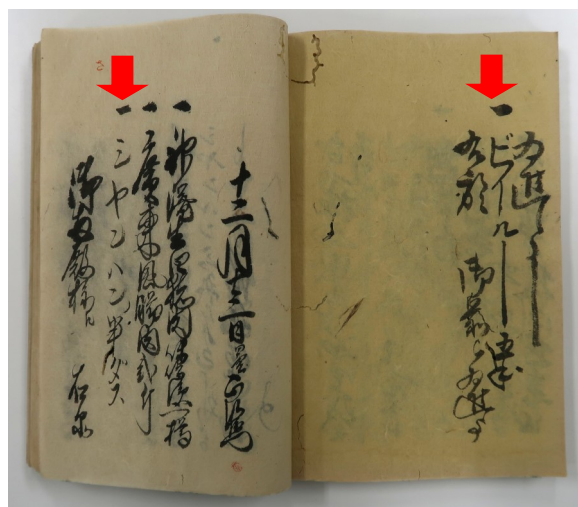
[9月3日:a b]「ヒイル」1瓶飲む

[9月5日:a b]「ヒワ」1瓶飲む

敬親がビールを頻繁に口にしていますが、本来酒を多く飲む人ではありませんでした(側近の回顧)。各記録には敬親がビールを飲む前、薬を飲んだことも記されています。18世紀後期の蘭学者大槻玄沢は著書「蘭説弁惑」で、ビールは食後に飲み、消化を助けるものと記しています。敬親はビールを舶来の嗜好品、酔うための飲み物としてではなく、胃の状態がすぐれない中、薬の一種として(あるいは医師の勧めで)積極的に口にしていたのではないのでしょうか。



○「御銀払御一紙 新御殿御台所」慶応3年12月8日条「ひいる七拾疋」



○「日帳 大殿様家従座」明治3年12月12～13日条「ビール五本」「シャンパン半ダース(ダース)」